

# 国学者上田秋成の儒仏観

## ——史論『遠駝延五登』を中心に——

杜 洋

### はじめに——問題の所在

上田秋成（1734－1809）は近世にあって『雨月物語』や『春雨物語』などのような不朽の名作を残した。秋成は俳諧、浮世草子、和歌、国学、煎茶道などにおいても活躍した。中興期俳壇を代表する俳諧師の一人である高井几董は、友人宛の書簡に「摂陽に無腸<sup>1</sup>といへる大家あり。詩をよくし、万葉をよみ（中略）無双の才子也」と記し、秋成を讃えた。秋成は大坂だけでなく、京都、江戸においても名を馳せた。江戸文壇の重鎮であった大田南畝は「我國の文を書事、余斎翁一石の中を八斗の才を保つ也。残二斗は一斗四五升、京坂のあいだに有べし。江戸はわづか四五升のみ」<sup>2</sup>とあって秋成の文才を賞讃した。

秋成の作品は一貫して人間の魂の問題を扱っており、作品の中に現れた秋成の人生観・世界観は彼の国学の素養に基づくものであると見て差支えはないだろう。そして、秋成は『雨月物語』と『春雨物語』の間の三十年間は作品を著していないが、その間は国学的知識を深め、国学的精神を育てていたのである。

『遠駝延五登』の草稿は享和三年（1803）、秋成が七十歳の頃に書かれたものと推測されており、秋成の歴史認識の総決算といえよう。秋成は『遠駝延五登』の中で日本における儒仏二教の受容に関する歴史について独自の批判的見解を述べるとともに、古代史論・万葉論なども展開している。『遠駝延五登』は秋成の「全思想の縮刷版」<sup>3</sup>とも言え、特に秋成の儒仏二教観の内容・性格が最も詳しく、まとまった形で示されている。そして『安安言』や彼の晩年随筆『胆大小心録』とともに、秋成の国学および思想の解明において重要な手がかりを含んでおり、彼の国学思想を究明するには、この三作品に対する研究が不可欠である。しかし、これまで『遠駝延五登』についての研究はわずかであり、これを全面的、総体的に論じた著書は森山重雄氏の『上田秋成 史的情念の世界』（三一書房）のみである。これまでの秋成研究では、秋成の文学者としての側面

の分析に重点が置かれてきたが、秋成の文学は秋成自身の思想を強く反映したものであり、読解にあたっては秋成の思想の実態を把握する必要がある。秋成は国学者と見なされてはいるものの、真淵や宣長に比べ、国学者としての評価は低く、秋成の説が誤解されて取りあげられることもあった。例えば、秋成の庶民としての分度論を講じる『安安言』について、「古事記偽書説を含む最も力をつくした古典論であって、千蔭<sup>4</sup>から国賊よばわりされた」とする評価もあるが<sup>5</sup>、実際に秋成が『古事記』を偽書だと呼んだことは一度も無い。また、秋成と宣長の間に起こった近世最大の論争<sup>6</sup>は、当時でも宣長の国学的見地に基づく皇国論こそが真淵以来の正統論であるとされ、秋成はその伝統と権威を無視した異端の学徒と非難された。<sup>7</sup>秋成は国粹主義的な思想を持つ宣長から日本人としての資格までも問われるほどであった。

本稿は、『遠駝延五登』を中心に、特に儒仏観における真淵、宣長との違いに着目し、秋成の儒仏観の本質を把握することを通じて、秋成の国学思想の実態を明らかにするものである。

## 一 『遠駝延五登』の成立事情

『遠駝延五登』は秋成が書いた随筆の草稿であり、当初見つかった本には題がなかった。出版を想定したものではなく、一度は秋成によって古井に投棄されたが、秋成の親友、大沢春朔がひそかに引き上げ、水に浸った草稿が残ったのである。この投棄は、秋成七十四歳、文化四年（1807）秋のことで、秋成は草稿五束<sup>8</sup>八十余部を自分の住居近くにあった南禅寺畔常林庵の古井戸に捨てた。秋成はこの出来事について『胆大小心録』の九十八条<sup>9</sup>で次のように語っている。

去秋ふと思ひ立（ち）て、蔵書の外にも著書あまた有（り）しとともに、五く、りばかり、庵中の古井へどんぶり<sup>10</sup>ことして、心すゝしく成（り）たり<sup>11</sup>。村瀬聞（き）て、「さてもさてもためしきかぬ人かな」とて、後の毎月集の序中に書（き）て送られしなり。（中略）さらば翁が無益の物も、心史も、こゝにおきて同談也。

秋成が投棄した自身の著作と「同談」であると言う『心史』とは、宋の遺民鄭所南が宋のことを偲んで著した詩文集のことである。鄭所南はその外緘封に「大宋世界無窮無極」や「此書出日一切皆吉」「後世是が出（で）ん時、太平な

るべし」と記し、『心史』が再び人の目に触れるときには平和であって欲しいという願いを込めて、古井に落とした。この『心史』は三百五十六年目の明の崇禎帝治世の末また世に出たが、太平どころか、崇禎帝は李自成農民軍の包囲に迫られ自殺し、農民一揆もたちまち清に破られ、『心史』に込められた鄭所南の願いとは裏腹の結果となった。秋成は『遠馳延五登』を含む草稿について、『心史』と同様に自身の望みは成就しない運命にあるだろうとまで考え、古井に捨てたのかもしれない。

『遠馳延五登』は藤井乙男氏によって整理され、『史論』と名づけられた。藤井氏はこの経緯について、『秋成遺文』において次のように述べている。

仮にかく名づけしも、原本二綴いづれも標題なし。国史・万葉・儒仏等に関する意見を述べたる随筆にして、間々『金砂』の中にあると同意の文あり。而して二綴ともに完備せず、且往々重複せる箇所あり。今その同事異文なるものは、文意の詳細なる方に就きて、他を割愛せり。<sup>12</sup>

こうして『史論』と名づけられた『遠馳延五登』は、その後中村幸彦氏が『上田秋成集』（岩波書店）において、『遠馳延五登』（おしえごと）と呼んでから、ずっと最近まで『遠馳延五登』（おしえごと）とされてきた。森山重雄氏は、昭和四十七年に刊行された『国書総目録』（岩波書店）の叢書目録（第八巻）に示される、天理本の『上田秋成雑集』（一二〇編）の第二十八編に『遠馳延五登』の文字を見て、この『遠馳延五登』（おしえごと）という呼び名に疑問を持った。『遠馳延五登』（おしえごと）は「教えごと」、すなわち教訓という意であるが、『遠馳延五登』（おだえごと）だと、どういう意味になるだろうか。次に示す『遠馳延五登』の冒頭部分から、その意味を知ることができる。

陶淵明云ふ、書を読んでしひて解得ん事、吾は求めず、解をつとむとて私をくはへ、いにしへの伝へ有か如に云は、なべてさかし人の心也。其大意を会して、詳なる事を索めざれとぞ。絃無き琴をかひさぐりて趣を楽しまれしと云は、是也。或人云、没絃琴とも見ゆるには、始より絃を調せざるにあらず。いづれか絶たるま、<sup>13</sup>

『遠馳延五登』（おだえごと）は「絃無き琴」と秋成が記す、陶淵明が奏でた「緒が絶えた琴」に拠ることがわかる。秋成は、陶淵明伝を引用し、陶淵明が弦

を張っていない琴を奏でて楽しんだという逸話を述べる。陶淵明が詩、酒、茶を愛したことは有名で、晩年の秋成も同様に「煎茶三碗、歌文三昧」の境遇にあった。また、陶淵明は儒教思想ばかりでなく、晩年には老荘や道家の思想にも傾倒していたが、秋成も晩年は老荘思想、また陶淵明に深く感銘を抱いたことはすでに堺光一氏<sup>14</sup>によって明らかにされている。『遠駝延五登』という題は、秋成晩年の思想的志向をよく示している。

## 二 『遠駝延五登』における秋成の儒教観

『遠駝延五登』には二つの特徴がある。一つは「これは歴史物語を断念した結果、小説では種々の制約があって充分に云いつくせなかった、胸中に鬱積した歴史観を吐露したものと考えてよい」と中村幸彦氏が指摘するように<sup>15</sup>、史論のなかに物語を内包し、物語の中に史論が込められていることである。例えば、『遠駝延五登』で述べられている、儒仏二教が日本に輸入されたことでもたらされた悪影響については、『春雨物語』の「血かたびら」や『雨月物語』の「白峯」でも触れられている。もう一つは秋成の文献意識が明確に示されていることである。<sup>16</sup>宣長の『古事記伝』を意識し、宣長の古文献絶対主義に懐疑的であった秋成は、「正史といへども、時にあたりては実をしりぞけ偽を設く」<sup>17</sup>と述べている。これは真淵や、特に「信」に基づく宣長の文献学とは異なっており、現代でも通用するという点で、秋成の古文献相対主義が評価されるべきではないだろうか。

秋成は『遠駝延五登』で、上代における天智系と天武系の争い、すなわち「壬申の乱」について次のように述べている。

如<sup>レ</sup>是王宗骨肉の離るゝ事の始は、異国の書に禪位纂立の智略を見聞て、天性の情慾を募らせ給ふ事のうれたけれ。応神の朝に百済国より貢奉れる学士等が教へは、人の性質を善に揉る術なれば、実に誰もしか有たき事と諸なふものゝ、おのれおのれが情慾にたがへば、我行なはんとおほしたつ人もなく、たゞ事をしるしとゝむるを益として、履中の御時に国毎に史官を置れしかば、民の情を知べき便とは成けんかし。是や智略を彼土にかる始なりけり。<sup>18</sup>

『古事記』の記述に疑問を抱いた秋成は、正史としての『日本書紀』、天智系の子孫の淡海三船が編集した『懷風藻』を拠りどころに、天智、天武王朝の運命を大転換させたのは外来の宗教である儒教の移入によるものと指摘した。「禪位

篡立の智略」とは中国における王朝交代の2つの形式をいう儒教の用語で、禪讓放伐の思想を言う。禪讓が、理想の聖天子である堯が舜に、そして舜が禹に位を譲ったことに始まって、天命を受けたとされる有徳者に平和的に政權を譲り渡すことであるのに対して、放伐は湯王が夏の桀王を放って殷王朝をたて、武王が暴君の殷紂王を伐ち周王朝をたてたことに始まる異姓革命説である。秋成は「壬申の乱」について、その当時の支配者が中国儒教の「禪位篡立の智略」の論理をもって禪讓放伐の思想を正当化したことによって、大友、大津皇子が「王宗骨肉」の争いを起こしたものとして捉えたのである。

ここまで、秋成が「儒教の智略」を利用した為政者の側において儒教の受容がもたらした害を指摘したことを確認してきたが、続いて臣下の立場における儒教の害についての秋成の言及を見てみたい。

又吉備公の才学は、菅相公にならべて人賞す。実に儒教に志深く、留学生にて唐土にわたり、阿倍朝衡<sup>19</sup>と名をひとしく、彼国にとゞめられしなり。惜むべし、智略の人にて有しかば、玄昉<sup>20</sup>と同じく阿諛の階梯にすすみ（中略）道鏡と同じく立て、朝政にあづかられしは、塩梅の臣にて（中略）功業の名ありといへども、若呂後の天禄道理に踰え、悪法師が福因大ならば、汚名今日に伝ふべき。きたな丸<sup>21</sup>の名ふさはしかるべき人々なり。<sup>22</sup>

秋成がここまで吉備真備を批判するのは、真備の儒教に関する受容の方法に問題があるからである。和気清麻呂は僧道鏡の皇位につこうとした野心をくだいたために、「きたな丸」と名づけられた。それに対し、儒教を志した吉備真備は儒教の本質を忘れ、時の権力者道鏡に屈服して、皇統をさえ危うくした人であるので、彼こそ「きたな丸」と名づけるべきだと秋成は言う。

秋成は為政者が儒教を利用して、遷都造営の奢靡の風に溢れた平安初期社会について、また儒教の現状について、次のように述べている。

儒教は人心を善に揉る道なれば、よしと聴つゝも、情慾にたがへば、嗟峨の御時より盛也といへども、実学を修したまふにあらず、奢靡になりゆく。是も亦ひとつの煩ひと思ゆ。西の国にもさまざまに流れわかれて、まことの道学は行なはるゝ世の稀也けり。<sup>23</sup>

西土にも此道さまざまに流れわかるゝ事、宋景濂<sup>24</sup>の七儒解と云にくはしくははれたり。

遊俠、文史、曠達、智数、章句、事功、道德の儒、ひとり孔子のみ、我は孔子を学ばんと云りしが（中略）知やすくとも行ひがたきは、道德の儒也。人は情慾を忘るゝ暇なければ、それを撓らるゝにおきて、儒釈二道ともに其人希也。（中略）故に樹れば倒れ、直きに矯れば戻る事、高貴の御あたりだに。況や庶民の行ふべからず。<sup>25</sup>

秋成は、日本での為政者と臣下における儒教の害について述べている。「天理を存し、人欲を排する」を主旨とする官学としての朱子学に対して、儒教の流入は「異国の書に禅位<sup>二</sup>立<sup>一</sup>の智略を見聞て、天性の情慾を募らせ」という状態を招き、「人は情慾を忘るゝ暇なければ、それを撓らるゝにおきて、儒釈二道ともに其人希也」といい、人間は何よりも情欲に訴えるものに引かれてしまうために、「智略」に用いられがちな儒教を秋成は厳しく批判した。一方、「人の性質を善に揉る術」、「儒教は人心を善に揉る道なれば」というように、儒教の「実学」的な本質は『遠駝延五登』においてだけでなく、秋成の多くの著書で評価されている。このように儒教を部分的には肯定する姿勢は、真淵や宣長には見られない。享保期の思想界に君臨した「徂徠学」は朱子学を厳しく批判し、近世国学はその「徂徠学」から多くを学び、真淵は儒教を批判した。しかし、秋成は同じ大坂出身の和学の祖である契沖、懷徳堂の五井蘭州らに影響され、上方和学の伝統を受け継いだ。そして、蘭学の輸入によってもたらされた合理主義、自由討論の雰囲気になった時代の風潮の中で、秋成は儒教が中国で発生した原因を分析し、「道德の実践」、「人心を善にする」という儒教の本質については肯定し、儒教を「智略の術」として情欲を募らせ、利用した人々を批判したのである。

### 三 『遠駝延五登』における秋成の仏教観

秋成は『遠駝延五登』において、仏教が日本に伝来した事情を以下のように書いている。

欽明の朝に、百済国、又銅像の釈迦に經典若干卷、幡蓋等をくはへて奉る。其表文に曰、此法最勝于諸法中、難解難入、周公孔子、尚亦不能以知、生於無辺無量之福德、覺悟無上之菩提と云は、人の情慾をつらし、性質を蕩かす妙法なりしかば、さしもおぼし足はぬ事なき御心にさへ、酔るが如く思し成て、礼拝の修行を群臣に問せ給しに（中略）君も臣も情願

をほしきまゝに祈らせたまへるにぞ、民の心には、我君の上に此仏の貴くてもしませるよと、共に志誠を致して、飽時しらぬ愚痴頓慾をつのらしむをいかにせん。此始に渡せしは、達磨、善導の教へに異にてぞありける。<sup>26</sup>

欽明朝の時に仏教が日本に伝わり、物部尾輿をはじめとする排仏論者の豪族たちは、故なき蕃神を崇敬するのは、日本の国津神の怒りを招く恐れがあるとして仏教の拒絶を主張したが、蘇我稲目はひとり仏教を支持し、礼拝し始めた。聖徳太子も仏教の普及に力を注ぎ、仏教を基調とした政治を行った。秋成は「無辺無量の福德を生ず」、「無上の菩提を覚悟する」という言葉に引かれて、「情欲」を募らせた人たちを批判し、日本に伝来した仏教は始めから達磨・善導の教えとは性質が違っていると指摘した。

達磨は禪宗の祖、善導は浄土教の大成者で、禪宗と浄土教は仏教の二大潮流とも言われ、日本の仏教はこの二教に多く影響を受けている。秋成の晩年の作品の中には、達磨・善導の名前がたびたび見られ、秋成が禪と浄土教に深い感銘を覚えたことが分かる。秋成は仏教の本質を「有を棄て無に帰すること」と考え、欽明朝の時に伝来した仏教は本質の「無」の意味をすでに失っていたと批判する。

続いて、為政者が仏教の伝来によって、奢靡におぼれるようになった社会の風潮について秋成は次のように述べている。

欽明天皇之代、仏法初伝、本朝、推古天皇以後、此教盛行、上自群公卿士、下至諸国黎民、無建寺塔者、不列人数、故傾尽資産、興隆浮図、競捨田園、以為仏地、多買良人、以為寺奴、降及天平、弥以尊重、遂傾田園、多建大寺（中略）又令七道諸国、建国分之二寺、造作之費（中略）十分之五、到桓武天皇、遷都長岡、造作既畢、更當上都（中略）於是天下之費、五分而三。<sup>27</sup>

秋成は情欲に募らせた人を批判すると同時に、心から尊敬した仏教の実践者については列挙し、評価しているのである。

#### （一）蘇我稲目と聖徳太子

馬子<sup>28</sup>、君を弑せし国罪をのがれ、其身は終をよくし、子孫三代威権を振ふ事、信ずる法の福果、実に無辺無量なる哉。太子<sup>29</sup>も同志に修法怠りなく

おはすれども、御齡四十九まで帝座に登りたまふ事あたはず。あまさへ御子山背王、父の善柔の性を稟得て、正しく女主の遺勅を賜はりながら、蝦夷の大臣に妨られて祚を踐たまふ事あらぬのみかは。逆臣にせまられて、みづから経死したまふ云かひなさよ。是には父太子の修したまへる功德もむなしく、後嗣をさへ絶たりしを<sup>30</sup>

仏教に対する熱心さでは、馬子よりも聖徳太子の方が勝っていたが、馬子が崇峻天皇を暗殺した罪も問われず、生涯にわたって権力の座にあったのに対し、太子は帝位になかなかつことができず、後継者を持てなかった。「無辺無量の福果を生ず」という点が評価されて導入された仏教であるが、馬子と太子の成功は無限ではなく、かえって馬子の方が福を得たように見えるという皮肉な結果となったことを秋成は指摘している。

## (二) 情欲の僧と真の僧

秋成は「仏法は大慈悲の志願なれば貴むべし。僧徒こそ忌はしけれ。」<sup>31</sup> といって、仏教の本質は評価し、批判すべきは僧であるとした。続いて、秋成が認めた真の僧と情欲に走る僧の例を見てみよう。

唐土、百済、高麗、新羅の国々より、王化に帰して来たる余に、此土にも英傑を出す事、彼善因悪縁のえらびなく燃ほこりたるが如し。義淵、弁浄、神叡、道慈、行基、行信、良弁、鑑真（中略）殿上に進み、帳内に入て、官禄に飽足も、修行丹誠なるは賞すべし。玄昉、実忠、道栄、道鏡等、姦計乱行、おのが分をもかへり見ず、或は貶せられ、流刑に処せらるれども、人道の国誅にあはざるは、無辺の福果の故にや。いともいぶかしく、且情欲のたのみよるべき法也けり。<sup>32</sup>

秋成は道鏡などの姦計乱行は、情欲に走ることによったものだと鋭く指摘したとともに、修行丹誠の僧の例も数多く出して、特に、道鏡のなす所を惡とみていた玄奘法師を「たふとき山僧にてぞ（あり）ける」と賞賛した。

終わりに

秋成は、「儒教は人の心を善に揉める道なればよし」「仏法は大慈大悲の志願なれば貴むべし」と述べ、儒教でも仏教でも個人が心の素養として受容する時



は正当に働くと考え、肯定的に受けとめた。ところが、これが世間の風潮となって人間の情欲を増大させ、「智略の術」として利用される場合については、激しく非難した。『遠駝延五登』の記述からは、秋成が懷疑的精神で儒仏の本質を見極め、相対的認識を持っていたという点で、真淵や宣長ら国学者とは異質であり、近代的な歴史認識を持っていたということがわかるのである。

## 注

- 1 「無腸」は秋成の俳諧の号である。
- 2 余斎は秋成の号である。引用は中村幸彦『日本古典文学大系 56 上田秋成集』、『胆大小心録』、316 頁。
- 3 森山重雄『上田秋成 史的情念の世界』、三一書房、1986、3 頁。
- 4 加藤千蔭。賀茂真淵の門人で、村田春海とともに江戸派を代表する近世中後期の国学者。寛政六年四月二日、加藤千蔭より宣長への書簡に、「大坂上田秋成など、『馭戎慨言』を斥非致候書を著候。貴君を難候とて、『古事記』をさへ二疑候様成、国賊二御ざ候。」とある。引用は『本居宣長全集 別巻三』、筑摩書房、1993、460 頁。
- 5 徳光久也『古事記研究史』に引用されている中村幸彦の説、笠間書院、1977。
- 6 高田衛『上田秋成年譜考説』、明善堂書店、1964、386 頁。
- 7 鷲山樹心『秋成文学の思想』、法蔵館、1979、100 頁。
- 8 『金砂』（万葉集注釈）、『金砂剩言』、『藤簍冊子』（歌文集）、『ますらを物語』稿、『遠駝延五登』。
- 9 中村幸彦『日本古典文学大系 56 上田秋成集』、『胆大小心録』、310 頁。
- 10 なげ込んで。引用は同上の注九。
- 11 さっぱりした気持ちになった。引用は同上の注九。
- 12 藤井乙男『秋成遺文』、修文館書店、1929、2、3 頁。
- 13 『全集第一巻』、『遠駝延五登』、55 頁。
- 14 堺光一論文「上田秋成と陶淵明——思想関係の考察」、『皇學館大學論叢』、皇學館大學人文学会、1978。
- 15 中村幸彦『春雨物語』解説、積善館、1947。
- 16 高田衛『上田秋成年譜考説』、明善堂書店、1964。
- 17 『全集第一巻』、『遠駝延五登』、77 頁。
- 18 『全集第一巻』、『遠駝延五登』、69、70 頁。
- 19 阿倍仲麻呂のこと。奈良時代の文人、吉備真備とともに遣唐留学生として留学した。
- 20 奈良時代の僧、吉備真備とともに政界にも権力を振るった。
- 21 奈良末の高官和氣清麻呂のこと。
- 22 『全集第一巻』、『遠駝延五登』、88 頁。
- 23 『全集第一巻』、『遠駝延五登』、94 頁。
- 24 中国、明初の学者。唐宋の古文と朱子学を窮め、当時の経学・文学における正統派の代表者である。
- 25 『全集第一巻』、『遠駝延五登』、128 頁。

- 26 同上、70 頁。
- 27 同上、92 頁。
- 28 蘇我馬子。聖德太子とともに排仏派を滅ぼし、崇峻帝を暗殺し、太子死後また権力を握った。
- 29 聖德太子。
- 30 『全集第一巻』、『遠駝延五登』、72、73 頁。
- 31 同上、86 頁。
- 32 同上、93 頁。
- 33 同上、124 頁。